

# 英語法副詞 no doubt の使用とその変遷

—— 副詞化と法助動詞との共起 ——

岡 本 芳 和

(金沢星稜大学人文学部 教授)

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第38巻第1 - 2号 (抜刷)  
2018年9月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

# 英語法副詞 no doubt の使用とその変遷

—— 副詞化と法助動詞との共起<sup>1)</sup> ——

岡 本 芳 和\*

## 1. はじめに

英語の *doubt* は品詞としては動詞と名詞があり、現代においてもそれぞれの品詞で使用されている。また、この *doubt* という語は形容詞 *no* と結びついて *no doubt* となり、副詞や返答語として用いられることもある。

(1)

a. 動詞として

I doubt if he is kind.

(『ジーニアス英和辞典』第5版)

b. 名詞として

He's made some great movies. There is no doubt about it.

(OALD (2010<sup>8</sup>: 455))

There is no doubt that breastfeeding is best for your baby and you.

It's natural, promotes your child's growth and helps to protect against allergy and infection.

(BNC, A0J (文番号: 1645))

---

\* 金沢星稜大学人文学部 教授

1) 本研究は学術振興会科学研究費基盤研究 C (課題番号 16K02782) の助成を受けている。

## c. 副詞として

The thing no doubt would have happened differently to another man. (FICT)

(Biber et al. (1999 : 866))

## d. 返答語として

‘Got your husband picked out already?’

‘Not yet. But I can assure you I’ll give it my full attention.’

‘No doubt.’ His smile was hard.

(Simon-Vandenberg (2007 : 14))

本稿では、まず、英語法副詞として知られる *no doubt* がいつの時代から使用されるようになったのか、次に、現代の *no doubt* の使用において、それが法助動詞とどのように共起しているのかを明らかにしてみたい。また、本稿の分析はコーパスを利用したデータの集計やコーパスからのデータを利用することを先に述べておく。

## 2. 調査範囲

本節では、*no doubt* に関するどのような構文を分析するのか、また、どのようなコーパスを用いて分析を進めていくのかを説明する。

### 2.1 調査対象となる *no doubt* の構文

本稿では次のような *doubt* が使用された構文を調査の対象とする。その理由は、*no doubt* の名詞表現と副詞の用法を比較し、検討したいからである。

(2) a. There is no doubt that S + V～

b. No doubt, S + V～. S, no doubt, V～. S + V～, no doubt.

(2a)の no doubt は名詞として, (2b)は副詞として機能し, それぞれ文頭, 文中, 文末で使用されていることを示している。

## 2.2 調査方法

調査の方法としては主にコーパスを利用する。使用するコーパスは, Corpus of English Dialogues (以下 CED) と Corpus of Historical American English (以下 COHA) と Google Books Ngram Viewer (以下 GBNV) である。これらを採用した理由は, 本稿では no doubt の使用について, 主として通時的な視点からこれを分析しなければならないからである。ここで, それぞれのコーパスについて概要を説明してみたい。

### 2.2.1 Corpus of English Dialogues (CED)

このコーパスは「実際の対話 (authentic dialogue)」と「構成された対話 (constructed dialogue)」の2つから成り立っており, 前者には実の発話が書面で記録されたものが, 後者にはその対話が著者によって構成されたものが含まれている。時代としては, 1560年から1760年までの200年間をカバーし, それが40年ごとに区切られて編集されている。また, テキスト数は177で, 総語数は1,183,690語となっている (Kytö ad Walker 2006: 12-13)。全体の概要と時代区分については表1と表2を参照されたい。

表1 CEDの全体の構成内容

	Authentic dialogue	Constructed dialogue
Minimum narratorial intervention	Trial Proceedings	Drama Comedy
		Didactic Works A. Other B. Language Teaching
Considerable narratorial intervention	Witness Depositions	Prose Fiction

表2 時代区分に見られる5種類のテキストの総語数

Period	Trial Proceedings	Witness Depositions	Drama Comedy	Didactic Works	Prose Fiction	Period totals
1 1560–1599	19,940	42,080	47,590	41,160	39,380	190,150
2 1600–1639	14,430	39,930	47,700	56,990	43,460	202,510
3 1640–1679	70,010	46,820	47,590	32,850	49,290	246,560
4 1680–1719	96,630	26,500	47,200	78,070	47,360	295,760
5 1720–1760	84,650	17,610	48,510	27,570	44,400	222,740
<b>Total</b>	285,660	172,940	238,590	236,640	223,890	1,157,720

なお、総語数は1,183,690語と発表されているが、表2において総語数が少ないのは、Miscellaneous textsの語数25,970を含んでいないからである。

### 2.2.2 Corpus of Historical American English (COHA)

このコーパスは現代アメリカ英語を編集したもので、総語数は4億語以上を超える大きなコーパスである。現在のところ、時代としては、1810年代から2000年代までをカバーし、10年ごとに時代が区切られている。ジャンルはFICTION, POPULAR MAGAZINES, NEWSPAPER, NON-FICTION BOOKSに分かれている。スピーディーな検索機能、データの表し方、例文の表示の仕方などにおいては使いやすいコーパスとなっている。

### 2.2.3 Google Books Ngram Viewer (GBNV)

このコーパスは、Googleが所有する蔵書の電子化されたデータを対象に、特定の語や語句の検索をすることができるツールとなっている。時代としては、1500年から2008年までの長い時間をカバーしており、史的コーパスとして利用することができる。また、ターゲットになっている語や語句が、年度ご

とにグラフで表されているため、その語や語句がどの時代によく使用されたのか、どの時代からあまり使用されなくなってきたのかが視覚的によくわかるように作られている(図1を参照)。さらに、用例もデータ化されているものであれば、簡単にアクセスすることができ、使いやすいコーパスでもある。



図1 GBNVの検索初期画面

図1はGBNVの検索初期画面である。あくまでも参考ではあるが、このグラフによると、Sherlock Holmesという語は1890年ごろから使用されるようになり、また、Albert Einsteinという語は1920年手前ごろから使用されるようになったことがわかる。

### 3. No doubt の使用とその歴史

本節では no doubt が史的な観点からどのように使用されてきたのかをコーパスの調査を基に考察する。一般的に、doubt の元々の品詞や意味を考えると、名詞から副詞へと使用が転換されたと考えるのが自然であり、その逆は考えることは難しい。

### 3.1 No doubt の起源

Oxford English Dictionary (以下 OED) では、名詞 *doubt* について次のような記述が見られる<sup>2)</sup>

#### (3) 名詞 *doubt* の起源

a. The (subjective) state of uncertainty with regard to the truth or reality of anything; undecidedness of belief or opinion.

1225 *Leg. Kath.* 2463 Ne beo þu na þing o dute Of al þet tu ibeden hauest.

(3)は名詞の意味の記述の中で最も年代が古い例で、それは1225年に記録されたものである。次に *no doubt* の起源について見てみよう。

#### (4) *no doubt* の起源

No doubt: undoubtedly, doubtless

1380 Wyclif *Wks.* (1880) 378 And no dowte..siluestre..haue synned more greuously þan giezi did.

*No doubt* に関する最も古い記述は、(4)にあるように、1380年であった。(3)と比べると、*no doubt* の方が歴史的には新しく記録されていることがわかる。使用頻度に関しては OED の記述からではわからないが、名詞から派生して *no doubt* が使用されるようになってきたと考えるのが妥当である。

### 3.2 1500年代から2000年代に見られる *no doubt* の使用

ここでは、まず GBNV を用いて、1500年代から2000年代に見られる *no doubt* の使用傾向を調べてみたい。図2で示すように、検索の中では *no doubt*

2) *doubt* に関する記述は OED 初版と第2版とも同じものが見られた。

## Google Books Ngram Viewer



図2 1500年代から2000年代までに見られる no doubt の使用傾向

の品詞を名詞と副詞で指定して、検索を行った<sup>3)</sup>このコーパスを用いることによって、いつの時代に最も使用されたのか、どちらのほうが多く使用されたかなどについては容易に知ることができる。

図2のグラフからわかることは、no doubt は1600年前後に頻繁に使用され、その後、1700年まで変動し続けた。1700年以降、1800年代後半までゆっくと増え続け、それ以降現代にかけ使用が減少していることがわかる。また、名詞の用法よりも副詞の用法のほうが多いことがわかる。このグラフには多くのデータが含まれているが、このGBNVから取得した例を提示する。

(5)

A dilligent seruaunt taking payne for his mayster truth to show,

**No doubt** his mayster will consyder, and agayne for him doe,

(H. Rhodes, F. J. Furnivall, *The Boke of Nurture, Or Schoole  
of Good Maners*)

3) 品詞を指定する場合は作品の検索はできないが、品詞を指定しなければ、用例が電子化されているデータであれば、それは見ることができる。

(6)

Some or other is purfued no doubt

Perhaps fome fearch for me, tis good to doubt the

Worft, therefore ile be gone.

(W. Shakespeare *A Most Pleasant Comedie of Mucedorus the Kings Sonne of Valentia and Amadine the Kings Daughter of Arragon*)

(7) There is no doubt that there was a short-hand writer's note.

(*Congressional Serial Set* U. S. Government Printing Office, 1870, p, 179)

(5)は1577年、(6)は1598年に出版されており、両例も *no doubt* が副詞として機能している。(7)は1870年に出版されたもので、*no doubt* は名詞として機能している。

次に、COHAにおいても *no doubt* の使用については似たような傾向が見られる<sup>4)</sup>。次の表を見てみよう。前節で説明したように、COHAは1800年以降の使用頻度について見ることができる。図2で示したように、現代に近づくにつれ、*no doubt* の使用頻度が減っていたが、COHAにおいてはどのような傾向が見られるのだろうか。

表3 COHAにおける *no doubt* の使用傾向

Corpus of Historical American English				COMPARE																			
SEARCH	FREQUENCY		CONTEXT	ACCOUNT																			
SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]																							
<input checked="" type="checkbox"/>	CONTEXT	ALL		1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	<input type="checkbox"/>	NO DOUBT	19682	98	667	994	972	1126	1240	1400	1782	1290	1292	1201	1303	1041	873	755	712	757	768	661	750
				1.203 seconds																			

4) 今回の *no doubt* は副詞を指定して検索を行った。

表 4 他の法副詞との使用傾向の比較

The figure consists of three screenshots from the Corpus of Historical American English (COHA) interface, each showing search results for a different adverb: 'CERTAINLY', 'PROBABLY', and 'MAYBE'. Each screenshot includes a search bar, a frequency table, and a context table. The frequency table shows the number of occurrences of the word in each year from 1810 to 2000. The context table shows the word's usage in various sections of the corpus.

Word	Frequency	Context
CERTAINLY	60108	1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870 1880 1890 1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000
PROBABLY	81112	1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870 1880 1890 1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000
MAYBE	65041	1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870 1880 1890 1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000

表3からわかるように、1950年代以降2000年にかけて、使用頻度が少なくなっていることがわかる。図2で示した傾向と同様の傾向が見られる。また、他の法副詞はどうなっているのだろうか。

確信性の程度は異なるが、ここでは certainly, probably, maybe の3つの法副詞と比較してみた。使用頻度においては明らかに no doubt は低いことがわかる。普段の日常会話においても no doubt よりも他の3つの法副詞を使用する場面も多いことから、その使用頻度は少ないことも予測できる。

#### 4. 法副詞 no doubt の意味と法助動詞の共起

本節では、コーパスからのデータを用いて通時的観点から no doubt と法助

動詞がどのように共起されているのかを考察する。共起に関する考察の前に、no doubt の意味を考える。

#### 4.1 no doubt の意味

ここでは、no doubt の意味について、辞書に見られる記述を簡単に説明する。No doubt の意味は少し困惑させられることがある。それはその意味が蓋然性に近い意味なのか、確信性に近い意味なのかはっきりしないことがあるからである。

- (8) Oxford English Dictionary (第1版, 第2版)

No doubt : undoubtedly, doubtless

- (9) Oxford Advanced Learner's Dictionary (第8版)

used when you are saying that something is probable.

a. No doubt she'll call us when she gets there.

used when you are saying that something is certainly true.

b. He's made some great movies. There is no doubt about it.

(OALD (2010<sup>8</sup> : 455))

- (10) Longman Dictionary of Contemporary English (第5版)

used when you are saying that you think something is probably true.

a. No doubt you'll have your own ideas.

b. She was a top student, no doubt about it. (= it is certainly true)

(LDCE (2009<sup>5</sup> : 455))

英英辞典では、(9a)や(10a)が示すように、no doubt はある事柄がありそうだと (probable) という場合に用いるとしている。一方で、(9b)や(10b)が示すように、

それよりも確信が高いとする場合は no doubt about it という形式で用いることになっている。

次に英和辞典の標記を見てみよう。

(11) 『ジーニアス英和辞典』(第5版)

- ① 疑いもなく, きっと (without a (any) doubt の方が強意的)

a. This will no doubt become a focus of controversy.

「これはきっと議論の中心となるだろう」

- ② たぶん, おそらく ※例文なし

- ③ [but と呼応して] なるほど～だが

b. There is no doubt she is pretty, but she isn't beautiful.

「なるほど彼女はかわいいが美人とは言えない」

(『ジーニアス英和辞典』(2014<sup>5</sup>: 632))

(12) 『ウィズダム英和辞典』(第3版)

- ① 確かに ※例文なし

- ② [but と呼応して] なるほど [確かに, 疑いなく] ～だが

a. No doubt, Ken wished to speak to me, but I don't want to listen to him.

「ケンが私と話したがっているのは確かだが, 私は彼の話を聞きたくない」

- ③ ((話) たぶん, おそらく (probably) ※例文なし

(『ウィズダム英和辞典』(2013<sup>3</sup>: 565))

英和辞典の説明に見られる問題点は「確かに」という意味を記載していることである。日本語の母語話者の観点から考えると, 「no doubt = 「疑いがない」 = 確信の程度は高い」と連想しやすいことは事実であろう。しかしながら, no doubt about it というフレーズではないので, 英英辞典に従って, no doubt その

ものの副詞の意味は蓋然性 (= ‘probability’) として考えた方がいいのではないだろうか。

また、Swan はこれについて興味深い考察をしている。Swan (2005<sup>3</sup>: 353) は、no doubt は ‘certainly’ ではなく、‘probably’, もしくは、‘I suppose’ を意味すると説明している。

(13) a. No doubt it’ll rain soon.

b. You’re tired, no doubt. I’ll make you a cup of tea.

(Swan (2005<sup>3</sup>: 353))

また、Swan は、物事が確かであることを言う場合は、形式的には there is no doubt that S+V~, 非形式的には without any doubt, certainly, definitely を用いると説明している。これは確信性を表すと判断できる。

(14) a. There is no doubt that the world is getting warmer.

「確かに地球は暖かくなっている」

b. \*No doubt the world is getting warmer. ((14a)のパラフレーズとしては非文)

c. Cycling is certainly healthier than driving.

「確かにサイクリングはドライブよりも健康的だ」

d. \*No doubt cycling is healthier than driving. ((14c)のパラフレーズとしては非文)

(Swan (2005<sup>3</sup>: 353))

Swan によれば、no doubt が確信性の意味を表す場合は There is no doubt that S+V~で用いることになり、ここから予測できることは、no doubt が単独で用いられる場合は蓋然性の意味になるということである<sup>5)</sup>

## 4.2 法助動詞との共起

ここでは、COHA に基づいて no doubt と法助動詞の共起について考えてみたい。調査の対象とする法助動詞は will, would, may, might, must, should とする。No doubt は話し手の心的態度としては確信の程度は高いことを表す。それがどのように法助動詞と調和を保ち、共起しているのかを見てみよう。

岡本（2016：132-133）では、法副詞と法助動詞の共起について次の2つの提案を行った<sup>6)</sup>

(15) ① 調和的な共起を作る条件：

法副詞・法助動詞ともに認識的な意味を持ち、それぞれの組み合わせにおいて確信度が同じレベルの法副詞と法助動詞が共起可能である。

② 構成的な共起を作る条件：

法副詞は認識的な意味を持っているが、法助動詞は非認識的な意味を持っている。しかし、これらの共起においては確信度の同レベルの調和は起こらない。

（岡本（2016：132-133））

この条件を基にして、コーパスに見られる法副詞と法助動詞の共起について考えてみたい。ここでのポイントは、no doubt がどのような法助動詞と共起し、その共起がどのような頻度で使用されているのかを探ることである。特に注意したいのが、調和的な共起を作る場合である。No doubt は確信度が高い法副詞に属するため、確信度が低い認識的助動詞との共起は起こらないということが予測される。次の表5は、上に挙げた法助動詞と no doubt が COHA の中

5) 小西（編）（2006：418）にも同様の指摘が見られる。ここから「蓋然性」という用語を用いることにする。なぜならば Swan の分析では、probability を表すと説明されているからである。また、OED では no doubt は undoubtedly, doubtless でパラフレーズされており、no doubt の意味をどのように考えるのかは引き続き今後の課題とする。

6) (15)に見られる条件は、岡本（2016）で説明したものを改訂している。

表5 no doubt と共起する法助動詞の頻度

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT ACCOUNT

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT WILL	114			5	10	6	8	5	10	11	1	1	11	4	5	7	8	8	6	2	1	5

2.172 seconds

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT ACCOUNT

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT WOULD	106			6	6	3	4	3	5	6	5	2	8	7	7	5	4	9	6	6	13	1

1.856 seconds

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT ACCOUNT

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT MAY	7			2		1						1		2	1							

1.078 seconds

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT CONTEXT +

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT MIGHT	5					1				1	1		1	1								

0.859 seconds

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT CONTEXT +

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT MUST	3			1					1				1									

1.094 seconds

Corpus of Historical American English

SEARCH FREQUENCY CONTEXT CONTEXT +

SEE CONTEXT: CLICK ON WORD (ALL SECTIONS), NUMBER (ONE SECTION), OR [CONTEXT] (SELECT) [HELP...]

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	<input type="checkbox"/> NO DOUBT SHOULD	5							1		1			1								2

1.176 seconds

でどれだけの頻度で用いられているのかをまとめたものである。但し、この表には名詞として機能している *no doubt* も含まれているため、どのような法助動詞がどの程度使用されているのかを参考にしてもらいたい。

表5からわかることは、*will* や *would* との共起の頻度は高いが、その他の法助動詞についてはその共起の頻度は低い。

ここからはそれぞれの法助動詞の共起について例を取り上げ、法助動詞の意味と共起について考察をする。

#### 4.2.1 *will* について

*No doubt* と *will* の共起は COHA の中では比較的多く見られる。次の例を見てみよう。

- (16) Our readers no doubt will think it is quite time that we should return from our long digression to the family at Eton.

Date 1824

Title Redwood : A Tale, Volume 1

Author Sedgwick, Catharine Maria, 1789-1867

Source Redwood : A Tale, Volume 1

- (17) And at that moment her statesmen no doubt will discover that the national honor is insulted or some high principle involved and another war will be in full blast.

Date 1927

Publication information Harpers : 1927-01 p. 141-147

Title Gentlemen prefer wars

Author I. A. R. (Ida Alexa Ross) Wylie

Source Gentlemen prefer wars

(16)や(17)の法助動詞 *will* は単純未来の *will* で、共起にも不調和は起こらない。

#### 4.2.2 *would* について

*will* と同様に、*would* との共起についてはその例が多く見られた。

(18) The extent to which he succeeded in doing this is remarkable, but he was forced to depend largely on ignorance and lack of thought and reasoning capacity among the people, and fortunately it has proved that intelligence and honest conviction control the majority in Massachusetts, as they no doubt would be found to do in the whole country, if the matter were brought to a fair test.

Date 1878

Publication information New York Times : (Editorials) : 18781107

Title A DEMAGOGUE'S DEFEAT

Source A DEMAGOGUE'S DEFEAT.

(19) The agitated Coverly no doubt would have phoned a frantic call for the police, then and there. Once Gray was in his rooms, however, his manner changed, and into his eyes there came a triumphant glitter.

Date 1922

Publication information Harper & Brothers

Title Flowing Gold

Author Beach, Rex Ellingwood, 1877-1949

Source Flowing Gold

(18)の *would* は仮定法過去、(19)の *would* は仮定法過去完了として用いられ、非現実世界のことを描写している。両方の *would* は元々単純未来の *will* が仮定

法のバックシフトを受け, **would** になったと考える。共起については問題はない。

#### 4.2.3 may について

認識的意味の **may** が表す可能性は, 認識的意味の **must** や **will** などが表す可能性と比べると, 低くなる。これを基に考えると, 蓋然性が高いことを表す **no doubt** とは共起しないことが予想されるが, 共起する例が COHA には見られた。しかしながら, COHA ではこれらの例は 1800 年代と 1900 年代前半に使用された例である。ここでは 2 例を示す。

- (20) Mr Heeren only alludes, and with the greatest impartiality, to those discussions among his neighbors and colleagues in Germany, relative to the authenticity of these renowned poems. This no doubt may be ascribed to the deep share of our author's father in law, the venerable Heyne, in the contest, which this subject excited about thirty years ago in Germany, and to which we have made some allusion, in our review of Mr Heeren's life of Heyne, in an early volume of the former series of this journal.

Date 1824

Publication information North American Review : April 1824 : 390-407

Title Politics of Ancient Greece

Source Politics of Ancient Greece

- (21) The slave-servants working in the tobacco manufactories can lay up 100 dollars a year. The rule is kindness, the exception no doubt may be cruelty. The great plenty in this country ensures everyone enough to eat ?

Date 1924

Publication information Harpers : 1924-03 p. 536-544

Title Letters from America [a group of hitherto unpublished letters by William Makepeace Thackeray (part IV)]

Author William Makepeace Thackeray

Source Letters from America [a group of hitherto unpublished letters by William Makepeace Thackeray (part IV)]

ここに挙げた(20)と(21)の例に見られる *may* は可能性を表しており、それが法副詞 *no doubt* と共起されている<sup>7)</sup>。一方、束縛的意味の *may* の例は今のところ見つかっていないが、この共起は構成的な共起を作るため、問題は生じない。

#### 4.2.4 *might* について

認識的意味の *might* もまた、*may* と同様に、モーダル・ハーモニーの観点から考えると *no doubt* との共起は起こらないと考えるのが自然である。しかしながら、過去においては、共起しているデータも見られる。(22)は CED から、(23)と(24)は COHA からの引用である。

- (22) Every Mannor in the beginning, no doubt, might keepe a Court Baron, and so it may at this day, vnlesse the Mannor be so dismembred, as it wanteth that which may warrant the keeping thereof :

Name of text file : D2HONORD

Text Identifier : HANDB OTH (Didactic Work, other than Language Teaching handbook)

Name of text : SURUEYORS DIALOGUE

Name of author : NORDEN JOHN

Date of speech event and date of publication : 1607

---

7) *may* との共起は問題が残るが、今後の課題としたい。次節の *might* についても同様である。

- (23) His course was a distinct warning to the Americans that, if they yielded now, they might expect some new Stamp Act or other measures of direct taxation to follow ; and so it simply invited resistance. That no doubt might be left on this point, the purpose for which the revenue was to be used showed clearly that the object of this legislation was not to regulate trade, but to assert British supremacy over the colonies at the expense of their political freedom.

Date 1888

Publication information Atlantic Monthly : March 1888 : 398-416

Title Beginnings of the American Revolution

Author John Fiske

Source Beginnings of the American Revolution

- (24) Among these are seven Quadrumana (apes, monkeys, and lemurs), animals who pass their whole existence in forests, who never swim, and who would be quite unable to traverse a single mile of sea ; nineteen Carnivora, some of which no doubt might cross by swimming, but we can not suppose so large a number to have passed in this way across a strait which, except at one point, is from thirty to fifty miles wide ; and five hoofed animals, including the Tapir, two species of rhinoceros, and an elephant.

Date 1922

Title The Malay Archipelago, the land of the orang-utan and the bird of paradise ; a narrative of travel, w

Author Wallace, Alfred Russel, 1823-1913

Source The Malay Archipelago, the land of the orang-utan and the bird of paradise ; a narrative of travel, w

COHAにおいても使用頻度が極めて少なかったため、ここで、GBNVを使って no doubt と may/might の共起についてその使用頻度を調査した。但し、この検索では no doubt の名詞と副詞は区別をしていないため、また、認識的意味と非認識的意味の区別はできないため、使用頻度だけを参考にしてもらいたい。

### Google Books Ngram Viewer



図3 no doubt と may/might の共起について

図3からわかることは、no doubt と may/might の共起は1700年代と1800年代では多少の変動はあるが、その共起の使用が見られた。また、1900年代に入りその使用は減少し、2000年に近づくにつれてその使用はほとんどなくなっているということである。

#### 4.2.5 must について

認識的意味の must が表す確信性は高く、no doubt との共起については問題はない。しかしながら、COHAにおいてはその例は少ない。

- (25) The man had a genius for the kind of gayety, poetry and romance which may, and no doubt must be, looked upon as exceedingly middle-class but which nonetheless had as much charm as anything in this world can well have.

Date 1919

Title Twelve Men

Author Dreiser, Theodore, 1871-1945

Source Twelve Men

束縛的意味の *must* については現在のところその例は見つかっていないが、それは構成的な共起を作るため、共起については問題は生じない。

#### 4.2.6 *should* について

*no doubt* と *should* の共起においても COHA においてはその例は少ない。以下 3 例挙げるが、いずれの *should* も束縛的意味を表し、構成的な共起を作っている。

- (26) Adrienne is said to be beautiful, but her submissiveness, her exasperating inhibitions, make her so unattractive that it is difficult to be as sorry for her as one no doubt should.

Date 1928

Publication information Time Magazine : 1928/09/28

Title Provincial Aridity

Source Provincial Aridity

- (27) Some personal data no doubt should never be marketed for commercial use – those on children, for example, or individuals’ DNA profiles. But establishing a general property right in personal data would create a potent new weapon for ordinary Americans to defend themselves against pressures on their privacy.

Date 1996

Publication information Washington Monthly : Nov 96 : Vol. 28 Issue 11, p 17, 4p

Title Privacy wrongs

Author Rule, James

Hunter, Lawrence

Source Privacy wrongs.

今のところ、認識的意味の *should* との共起は見つかっていない。今後の課題としたい。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、コーパスを用いて歴史的観点から法副詞 *no doubt* の調査を行った。歴史的に見て、*doubt* 自体は 1225 年に記録されたものが最古であり、法副詞 *no doubt* としての語句は 1380 年に記録されたものが最古であった。このことから、*no doubt* の方が歴史的に見ると新しく、*doubt* から *no doubt* が派生してできたと考えることができる。また、*no doubt* は *I have no doubt* や *There is no doubt* のような名詞表現よりも、副詞として使用されることが多いこともわかった。法助動詞との共起については、主に数量的なアプローチを用いて、分析した。*will* や *would* に関しては共起数が多くみられたが、その他の法助動詞との共起は少ない。また、調和的な共起では起こらないことが予測された *no*

doubt と may/might の共起について考えた。実際に、この共起は 2000 年代では起こりにくいと考えられるが、過去においてはその共起がデータとして残っていたことがわかった。また、いくつかのコーパスを通して、使用頻度に関することもわかった。今後の課題としては、法助動詞との共起について通時的な観点から、他のコーパスも用いてもう少し検討を重ねていきたいと考えている。

### 参 考 文 献

- 新井洋一. 2012. 「通時的英語学研究のためのオンライン版コーパスアナライザー」. 『人文研紀要』, 第 75 号, pp. 1-30. 中央大学人文科学研究所.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Huddleston, Rodney. and Pullum, Geoffrey K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoye, L. 1996. *Adverb and Modality in English*. London and New York: Longman.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』. 東京: ひつじ書房.
- 小西友七 (編). 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』. 東京: 大修館書店.
- 小西友七 (編). 2006. 『現代英語語法辞典』. 東京: 三省堂.
- Kytö, M. and T. Walker. 2006. *Guide to A Corpus of English Dialogues 1560-1760*. Acta Universitatis Upsaliensis. *Studia Anglistica Upsaliensia* 130. 107pp.
- 岡本芳和. 2016. 「英語法副詞と英語法助動詞の共起と話し手の心的態度について」. 『平成 27 年度国際モダリティワークショップーモダリティに関する意味論的・語用論的研究ー発表論文集』 10: 131-145.
- Simon-Vandenberg, Anne-Marie. 2007. "No doubt and Related Expressions: A Functional Account." In Mike Hannay and Gerard J. Steen (eds.) *In Structural-functional Studies in English Grammar*, 9-34. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Simon-Vandenberg, Anne-Marie and Karin Aijmer. 2007. *The Semantic Field of Modal Certainty. A Corpus-Based Study of English Adverbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Swan, M. 2005<sup>3</sup>. *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.

### 使用コーパス

Corpus of English Dialogues  
Corpus of Historical American English  
Google Books Ngram Viewer  
British National Corpus

## 辞 書

Oxford English Dictionary. 1928. 1989<sup>2</sup>. Oxford : Oxford University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English. 2009<sup>5</sup>. London : Longman.

The Oxford Advanced Learner's Dictionary. 2010<sup>8</sup>. Oxford : Oxford University Press.

『ジーニアス英和辞典』. 2014<sup>5</sup>. 東京 : 大修館書店.

『ウィズダム英和辞典』. 2013<sup>3</sup>. 東京 : 三省堂.